

第21回 文学館演習 ―日本近代文学資料の探索と処理―

2017年度 講義概要

2017年8月22日(火)～8月26日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

坂上弘（館理事長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

中島国彦（早稲田大学名誉教授）

50年以上もの歴史の中で、当館にはおびただしい資料が収蔵されることになった。資料を守る、それを後世に伝える、その強い意志がすばらしいコレクションを生み出している。資料は「もの」ではない。それに対する「敬意」とそこから生まれる「文学へのよこび」があって初めて、光り輝く。その歴史を振り返り、将来への展望を考えて行きたい。

2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料（書簡・ノート）

安藤宏（東京大学教授）

近代文学の資料は「活字」になったものとならなかったものの間に決定的な性格の違いがある。書簡、日記、メモ、ノートなど、「活字」にはなかった直筆資料と、実際に世に問われた作品との関係をどのように論じるか、というのは研究の大きな課題で、自覚的な方法意識が求められる。作者の直筆資料を調査、研究する方法について、館に収蔵されている太宰治の資料を中心に、わかりやすく解説したい。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 図書

東郷克美（早稲田大学名誉教授）

作家の個人全集について考える。作家没後の本格的全集には、その本文の選定・配列・注記など、担当の編集委員・研究者などの当該作家・作品に対する一貫した解釈と文献学的方法意識が集約的に反映されているはずである。今回は北村透谷・樋口一葉・宮沢賢治をはじめとする特色ある全集編纂の歴史を概観するとともに、戦後の太宰治・井伏鱒二の全集成立事情や現在刊行中の夏目漱石・谷崎潤一郎の新全集にもふれてみたい。

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌

宗像和重（早稲田大学教授）

近代文学の作品は、一般に、雑誌や新聞などに発表され（初出）、著者の推敲を経て、あらためて単行本として刊行される（初版・初刊）。その間に、本文の異同が生じることも少なくないが、こうした原稿から初出、そして著書へという本文の位置づけを、どう考えればよいだろうか。また、雑誌は単に作品発表の場であるだけでなく、明治期の『早稲田文学』や『文章世界』が自然主義の牙城となったように、その性格や編集方針、あるいは編集者が作品と密接に関わることも多い。文字通り、「雑誌の宝庫」である日本近代文学館の資料を中心として、こうした雑誌と近代文学との関わりを考えてみたい。

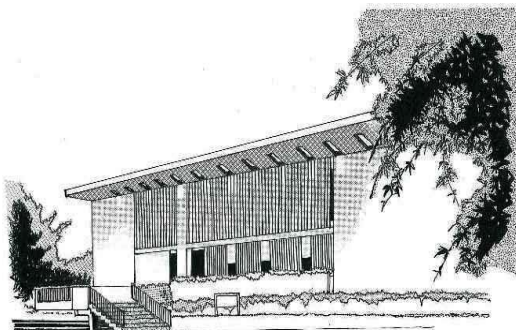
④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞

日高昭二（神奈川大学名誉教授）

新聞に連載された小説は、そこに挿絵が挿入されることで、どのような問題が生まれるのか。文字と挿絵が一つの空間を占めるこの事態は、必ずしも調和的とは限らず、むしろその非対称性や違和を現出することもあるだろう。一日ごとに新聞小説に向き合う読者の反応を想定しながら、そのつどスペース・ドラマを惹起しているこのジャンルの意味を新たに見直してみよう。文学館所蔵の菊池寛・上司小剣など大正期の新聞小説をとりあげて考えてみる。

資料の

声を聞く―



図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。（スリッパ持参ください）

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館で所蔵している雑誌の中から、挿絵・写真ページをピックアップし、写真利用カードを作ります。出版物やテレビ番組などで利用される文学写真の、整理方法の一例です。

肉筆資料の解説（実習）

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

3. 文学をめぐる問題

①海外における日本文学の研究（講義・演習）

和田博文（東洋大学教授）

海外の研究者との国際的共同研究が、ここ十年ほどの間に活性化してきた。今年度は東アジアでの共同研究のなかで、日本統治下の台湾の研究について考察する。台湾国立図書館のデジタルデータを紹介し、現在進行中の日台共同研究『帝国幻想と台湾』、および『コレクション・台湾のモダニズム』全40巻を軸に講義をする予定。

②文学と大衆・女性（講義・演習）

宮内淳子（近代文学研究者）

大正から昭和にかけて、教育の普及や出版事業の拡大等により読書習慣が急速に国民の間に広まった。まず、婦人雑誌が読書に「実用」を持ち込み、多様な内容と手ごろな値段で売り上げを伸ばす。これが、大衆雑誌『キング』の路線を開いた。こうして文学は選ばれた男性エリートの占有でなくなり、書き手や読み手も変質していった。実際に影響力をもった雑誌の数々を具体的に手にして、この時代に起きた変化を検証してみたい。



4. 文学の周辺(1)

①出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）

紅野謙介（日本大学教授）

伊藤整がD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』翻訳を刊行したのが1950年。版元は戦前から良心的な文芸出版で知られる小山書店であった。しかし、これが刑法175条違反として摘発され、チャタレイ裁判が始まる。同時に『群像』では大岡昇平『武蔵野夫人』が連載され、ベストセラーとなり、映画化までされることになる。こうした一連の出来事を通して、占領末期における検閲の問題と作家、出版界の葛藤をとらえてみたい。

②文学と映画（講義・演習）

十重田裕一（早稲田大学教授）

日本において文学と映画がどのように遭遇したかを、1920年代に焦点をあてて考えてみたい。1920年代日本では、さまざまな芸術間の交流が顕著にみられるようになり、新しい表現の可能性を模索する状況が呈していた。なかでも、文学と映画の交流はとりわけ盛んに行われ、モダニズムの作家を中心に、映画の表現を意識した新しい小説の実験が試みられていた。その実験の一端を、同時代の具体的な映画を紹介しつつ検討する。

5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

②資料の公開・展観（実習）

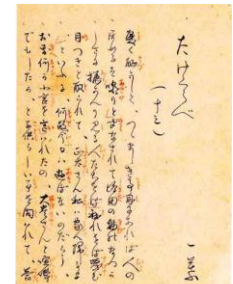
文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。

6. 文学の周辺(2)

①文学と美術・音楽（講義・演習）

中島国彦（早稲田大学名誉教授）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、近代の作品に流れる唱歌・童謡・わらべうたの系譜をたどりながら、これと関連する挿絵・絵画の抱える問題を考えていきたい。「たけくらべ」ひとつとっても、映像の場面や作中の歌がどう興味深いかがわかるはずである。なるべく多くの作品に触れるつもりである。



②書画と文学（講義・演習）

池内輝雄（近代文学研究者）

芥川龍之介の余技として河童の絵がとくに有名。芥川は少年の頃から絵を描くことが好きだった。ここでは、江戸期の文人画家池大雅に言及した書簡、また中国の詩人李商隱や李九齡の詩をとりあげた自筆画やエッセイ「野人生計事」、さらに晩年の「歯車」を対象に、書画が単に趣味の問題ではなく、彼の心境や文学世界と深くかかわることを考える。また、芥川の影響を受けた戦後作家中村真一郎の『木村兼葭堂のサロン』にも触れる。



③草稿・注釈をめぐる問題（講義）

十川信介（学習院大学名誉教授）

これまでの資料に関する講義・演習をまとめる意味で、二、三のテキストを用い、そこからどのような問題が引きだせるかを考えていきたい。書かれている内容からどんな問題を見つけられることができるか、各自が受講前に二つ程度の問題点を考えておいて欲しい。今年のテキストは確定していないが、漱石の文章と現全集「注解」から選び、コピーを事前に（七月中旬）配布するので、読んでおくこと。